

日本細菌学会
2019年第3回理事会議事録

- 日 時:2019年11月29日(金)13:00~17:00
- 会 場:北里柴三郎記念館2階・北里白金サロン
- 出席者:赤池孝章 理事長、
大西 真、川原一芳、河村好章、菊池 賢、小松澤 均、高井伸二、寺尾 豊、
長宗秀明、西川喜代孝、堀口安彦、松下 治、山口博之 各理事
川端重忠、西川禎一 両監事、阿部章夫 関東支部長(オブザーバー)
- 欠 席 者:富田治芳、中川一路、中根明夫、林 哲也 各理事

※五十音順 敬称略

I. 開会(理事長挨拶)

赤池理事長より以下の挨拶があった。資料に目を通して気づいているかと思うが、本日は報告事項と審議事項が多くある。できるだけ効率良く審議をしていきたい。通常であれば、休憩を挟むが通して行いたい。毎年理事会は4回開催されていたが、予算運用経費の削減の意味も含め今年度は3回とした。そのようなこともあって議題等が多い。

II. 確認事項

前回理事会の議事録案について:赤池理事長より以下の説明があった。本日の会議の間に議事録に目を通してもらい、気づいた点等を審議が終わるまでに知らせて欲しい。*修正や追加はなく議事録は確定した。

III. 総会報告

- 1) **第92回総会終了報告(山口博之 総会長):**第92回山口総会長より資料に基づき以下の報告があった。参加者は招待者29名を含め762名であった。まず概要報告だが、例年より300名程度参加者が少なかった。一方で、今回は、新しい試みを実施した(以下1-6)。1.学会参加のための予算執行がより円滑に行くよう年度を跨ぐ会期変更:通常は、3月末に総会を開催していたが、4月末に変更した。賛否両論あったが、結論から言うとこの時期に実施するのは、教育期間では授業などが始まっていることから、少し無理があったのかと思う。その一方で、札幌での開催となると雪の影響を考慮する必要があり、会期変更は致し方なかった。2.学会参加費の値上げ:今回は誠に勝手ながら、参加費を値上げした。収支決算からすると、値上げが功を奏した。3.デジタルポスターと称して一般演題発表者全員へ3分間の口頭発表の機会の付与:ASMではやられていることだが、デジタルポスターを導入した。一般演題として登録してもらったポスター演題全てに口頭で発表してもらった。4.一般演題から優秀な発表を表彰:通常はポスター発表から優秀な演題を選び表彰していたが、今年は、ワークショップに選抜された一般演題の中からも優秀な演題を選び表彰した。5.学会運営費の一部を賄うために会員から寄付を募集:これも賛否両論あったが、会員から寄付を募った。収支決算からすると、寄付も功を奏し、収支のバランスがとれた。6.学会活動を一般に広く発信するためのプレスリリースの試行:河村理事が中心となって本部の取り組みとして今年度初めて実施した。次に収支決算だが、収入の部で、招待者を除き参加者数は733名、寄付金などを加えると、21,948,050円であった。支出だが、予算を切り詰めた結果(ミキサーの中止、飲み物無料配布の取りやめなど)、21,948,050円となった。今回の新たな試みに関しては、今後の総会でもブラッシュアップした試してもらえればと思っている。赤池理事長より以下の発言があった。堀口前理事長の頃よりは始まった総会補助金の削減だが、第92回総会の収支決算も参考に、今後検討していきたい。
- 2) **第93回総会準備状況報告(荒川宜親 総会長):**荒川総会長が欠席のため早瀬氏より、資料に関する説明があった。荒川総会長から受け取った資料は、p13-17に付けた。引き続き赤池理事長から総会の概要に関して報告があった。開催場所は、ウイングあいち(名古屋)、会期は2020年2月19日(水)-2月21日(金)。事前参加登録は2020年9月2日(月)-12月25日(水)。一般演題登録数は、391演題。事前参加登録は、現在も進行中(11/29時点)。他学会参加者の本総会への相互乗り入れのような、新たな取り組み(企画)が行われる予定。将来的には関連学会間で各会員の相互乗り入れができるようになるのかもしれない。詳細については、総会前日の理事会で荒川総会長に報告してもらうことにする。今回の総会では、浅川賞への応募がなかったことから、その受賞講演がない。そこでその枠に、荒川総会長から、特別講演(薬剤耐性国際シンポジウムでの講演に招聘しているノースイースタン大のProf. Kim Lewisのダロバクチンという新規抗生物質に関わる講演)を入れることに関する

る提案があった(審議の結果、その場で了承された。*時間枠については赤池理事長に一任)。長宗理事より、以下の追加発言があった。AE 企画からの情報では、総会前日の理事会が 13:00-16:00、評議員会が 16:00-18:00 となっている。

- 3) **第94回総会準備状況報告(松下 治 総会長)**: 松下総会長より資料に基づき以下の報告があった。まず概要だが、会場は岡山駅西口と歩行者デッキで連結されている岡山コンベンションセンターを使用する。会場だが、コンベンションセンターの 1・2 階のイベントホールをポスター会場に用いる。3・4 階をメイン会場として使用する。この会場は利便性が良いが、1 日フルに借りると 450 万円程度かかる。ICD 講習会等は非営利のものとしてみなされるので、岡山県医師会館にて行う(費用負担が少なくなるので)。岡山県医師会館は、岡山コンベンションセンターと歩行者デッキで直結されている。会期は、2021 年 3 月 23 日(火)-3 月 25 日(木)を予定している。3 月 22 日に、理事会と評議員会を別途開催する予定である。ICD 講習会(テーマは梅毒)は最終日に開催する予定。キーノート・スピーチだが、パスツール研究所の Dr. Stewart Thomas Cole に依頼し快諾してもらった(結核に関わる話題)。総会長企画については、細菌学会を 25 年程度の単位で考えると、若年層が育っていないということで、危機的な状況にある。35-45 歳程度の会員がいまだに若手と言われている。学部生や大学院生が中心となる持続可能な学会のあり方を考える上でとても大切かと思う。学会という場でもう少し根本に立ち返るといった、言い換えると人を育てる、ということの中でどのような課題があるのだろうか、そこを具体的に解決していくことができればと考えた。細菌学研究者は、「留学による異文化との出会い」、「研究テーマの着眼と展開」、「他の分野との共同・産業化」が、結節点になると思われるので、これらをテーマに話をしてもらおうセッションを組みたい。細菌学会に来て良かった、振り返ってみれば人生の曲がり角のような学会であった、と思われるような学会にしたい。留学に関する話題提供のセッションでは、留学先の研究生生活はもとより、留学先の情報を示してもらい、実際に留学を考えている若い研究者が、留学先候補を選定し考えられるような場としたい(留学先情報をボードに貼る)。産業化を組み込む研究展開のセッションでは、企業サイドに入ってもらい、企業が求める研究内容を具体的に紹介してもらおう予定である。具体的に 20-30 歳代の一人ひとりに、助かったと思ってもらえるような学会を目指したい。コンパネーターと発表者の候補がいれば、ぜひ理事会からも提案してもらいたい。中国・四国支部会では、このような総会長企画の開催について了承されている(具体的に一件の推薦も得ている)。

IV. 報告事項

1) 総務部会報告

- ①**総務・渉外担当報告(河村理事)**: 河村理事より資料に基づき以下の報告があった。2019 年 3 月 31 日と比較すると、2019 年 11 月 22 日現在、名誉会員 34 名(±0)、正会員 1,630 名(-59 名)、学生会員 455 名(-61 名)、賛助会員 29 社(-2 社)、計 2,085 名であり、およそ 70 名減少した。昭和 60 年からの会員数の推移では、会員数減に歯止めがかかっていない。

- ②**選挙関連担当報告(川原理事)**: 川原理事より以下の報告があった。2020 年は選挙の年である。審議事項で 2020 年選挙スケジュールと選挙管理委員会委員について諮りたい。

2) 財務部会報告

- ①**会費・会計担当報告(河村理事)**: 河村理事より資料に基づき以下の報告があった。まだ年度途中なので、10 月末までの中間報告となっている。収入の部だが、今年度は寄付(500 万円(株)日本微生物研究所)があったが、この寄付を除くと執行率は 97%程度となっている。ほぼ予算案通りに収支が進行している。支出の部だが、総会準備費とシンポジウム関連費については予定通りだが、支部支出に関しては、申請があった支部に支援金を出しているため、実質的には 47%の執行率となっている。広報関係は予算に対して 45%しか執行していないが、ホームページの英語版作成に着手していないこともあってそのようになっている。選挙関係費の執行率も 25%と低いが、委員の選考会(開票)などはしっかりと行われている。経費削減努力によりそのようになっている。旅費だが、今年の理事会が 1 回少なくなっていることと、本日の理事会の分が加味されていないこともあって、執行率が 34%となっている。学会賞関連費だが、来賓の旅費がなかったためこのようになっている。印刷費の執行率が 139%と増えているが、九州大学で病原体等安全取扱・管理指針を購入してもらっている関係上、増刷(600 部、35 万円)に関わる費用である。

3) 広報部会報告

- ①**広報・メディア分野担当報告(河村理事)**: 資料に基づき河村理事より以下の報告があった。まず市民公開講座の概要について担当の菊池理事から説明する。「菊池理事: 細菌学会としては、広く市民に開かれた情報発信を行なっていくためにも、オリンピック・パラリンピックの開催に際して、私たちが考えるべき点に関して、市民公開講座を日本細菌学会・東京大学食の安全研究センター共催で開催する(会場費は高くない)。日程は、2019 年 12

月 22 日(日)14:00~17:00(開場 13:30)。会場は東京大学農学部 1 号館 8 番教室。具体的には、2019 年の入管法改正、2020 年のオリンピック・パラリンピック開催などで海外から多くの方々を迎えるのにあたり、食を介した感染症が増えることが想定される。我々はそのようなことに注意すべきか考えてみたい。メディアと保健所、さらに区役所などにチラシを配布し参加者を募る。」それを受けて本部としては、一般市民が対象ということで、その時に資料にあるようなチラシを用いて日本細菌学会を紹介する。チラシは広く配布したいので、希望者は申し出てほしい。資料は今年の 3 月の医学会総会が開催された際に、加盟学会の紹介が行われ、細菌学会の紹介の際に使用したものをベースにしている。資料には、学会の基本情報、歴史・活動内容などが記載されているが、一般向けなので、著名な北里先生の名前は赤字とした。活動報告を示すポスターには、病原体等安全取扱・管理指針の刊行(「病原体等安全取扱・管理指針」、細菌学教育資料の提供(「ようこそ不思議な細菌の世界へ」、「細菌学教育用映像素材集(第4版)」、「細菌の無菌操作と染色」、「グラム陽性球菌の同定・グラム陰性桿菌の同定」)。無料出張講演の実施(日本細菌学会と千葉大学大学院医学研究院は共同して全国の小学生、中学生、高校生を対象とした人材育成の為に「無料の出張教育講演」*無料出張講演のパンフレットも当日配布する予定)、若手研究者育成について(細菌学若手コロッセウムの支援)、第 93 回日本細菌学会総会(名古屋、ウインクあいち、2020 年 2 月 19 日(水)~21 日(金))の開催案内。ポスターには QR コード(細菌学会ホームページにリンク)を配置し、一般の方が細菌学会の内容について、確認しやすくした。ポスターは会場の入り口に掲示する予定。出席者の市民公開講座への感想はもとより、職業や細菌学会への希望(情報ソース)を聴取するために参加者へのアンケートも実施する。また、良い機会なので、東京の製薬企業向けに、賛助会員入会案内(申込み用紙と共に)も配布する予定である。賛助会員に関しては個人会員(教育賛助会員とジュニア賛助会員*小学生から高校生)についても案内と申込み用紙を配布する予定である。賛助会員(個人会員)が 2020 年度から本格的にスタートする。それに合わせて細菌学会ホームページ掲載用の案内も作成した。合わせて確認してほしい。

②ホームページ・SNS 分野担当報告(中川理事): 特になし。

4)産官学連携部会報告

①産官学連携分野担当報告(菊池理事): 菊池理事より以下の報告があった。総会では、産官学連携委員会企画のシンポジウムを行う予定である。

5)学術部会

① 学術支援・評価担当報告(長宗理事): 長宗理事より資料に基づき以下の報告があった。今回総会で開催する 33 のセッションが決まったので概要を報告する。公募企画では 5 枠(シンポジウムは 4 つ、WS は 1 つ)、総会長企画としては 5 つ(シンポジウムは 2 つ、WS は 1 つ、さらに特別講演が 2 つ(1 つは国際シンポジウムから浅川賞の時間枠に移ったもの))。シンポジウム企画調整委員会枠が 18 つ(シンポジウムは 13 つ、WS は 5 つ)。選抜 WS については、選考が終わり 5 つの枠が決まっている。現在、総会本部 AE 企画にて総会に向けプログラムを組んでいる最中である。意見交換の結果、コンビナーの重複などについて、長宗理事と赤池理事長で調整することになった。

② 学術企画分野

1. シンポジウム等企画担当報告(長宗理事): 特になし。
2. バイオセーフティー担当報告(大西理事): 大西理事に代わり早瀬氏より以下の報告があった。来年度には病原体等安全管理指針の改訂版が刊行される予定と聞いている。それに際して、現在その印刷費の見積もりを取っている最中だが、その費用を来年度の予算案に組み込んでほしい。
3. ICD 制度協議会等担当報告(菊池理事): 菊池理事より以下の報告があった。特に報告事項はないが、次回の ICD 協議会は来週開催される。

③ 学術交流分野

1. 日本微生物学連盟/日本学術会議担当報告(川原理事): 資料に基づき川原理事より以下の報告があった。9 月 20 日に微生物学連盟の会議(日本学術会議総合微生物科学分科会・IUMS 分科会・病原体学分科会合同会議)が開催された。IUMS 分科会だが、アメリカ(分担金を支払っていない)やイギリス(分担金が少ない)が手を引いている。IUMS への日本人の参加者は毎回約 200 名程度であるが、会員数 5000 人で登録し、6500 ドルを支払っている。これは投票権を確保する意味では役立っている。今後、IUMS との関わり合いについて議論してほしい。中川理事は IUMS の理事だが、我々としても発信するチャンネルを生かしていきたい。病原体学分科会だが、「我が国における微生物・病原体に関するリテラシー教育」の提言が完成した。日本微生物学連盟賞だが、日本微生物連盟では賞を作ることになっていたが、今回制定された。名称は野本賞(故野本昭男先生のお名前由来)。カテゴリーを 3 つ(病気と健康、生活への応用、環境とエネルギー)に分けて、3 名受賞とする。受賞対象者の年齢は受賞年度 4 月 1 日で 45 歳以

下。1 回目は本年 12 月中旬を応募の締切とする予定。日本微生物学連盟共催・講演学術集会との共催シンポジウムだが(名古屋の学会で開催)、3 件(日本ウイルス学会、日本細菌学会、日本感染症学会)の応募があり、メール審議にて承認され、連盟の共催となり、各々 10 万円の補助が決定された。日本細菌学会と日本感染症学会が企画したシンポジウムはそれぞれ同じ学会の組合せだったので、次年度からは同じ組み合わせのシンポジウムは 1 件のみとすることになった。日本微生物学連盟主催フォーラムだが、今年度は日本ウイルス学会が企画した連盟との共催シンポジウムを「フォーラム」として取り扱うことになった。このシンポジウムのみ日本語での講演とし、一般公開する(10 月 31 日、タワーホール船堀)。日本微生物学連盟の広報に関しては、連盟のホームページを改修している。「おしらせ」欄の改修、情報収集ページ(書き込みができるもの)の仮設置などを行っている。改修ページへの移行について、審議の結果、承認された。日本微生物学連盟学術団体の紹介だが、今回は日本細菌学会(川原理事)、日本食品微生物学会(木村先生が紹介)の紹介がスライドを用いて行われた。その他として、気候変動についてわが国ではあまり取り上げられないが、国連サミットに合わせて日本学術会議からメッセージを出し、学術会議のホームページに掲載した。それに関連して、森林総研の雑誌の特集号「気候変動と世界の森林」を資料として配布された。オーストラリアの Cavicchioli 教授から、日本微生物学連盟宛てに、「微生物と気候変動」についての Consensus Statement に関する依頼があった(1 週間程度の期間を設け、意見がない場合には細菌学会も連盟に賛同するというで回答することになった)。連盟では常務理事会で対応を検討するが、それとは別に各学会でも対応を検討してほしい、といった依頼があった。4 月に開催した合同会議の正式な議事録を添えたので確認してほしい。

2. **日本医学会連合担当報告(菊池理事):** 特になし。
3. **予防接種推進専門協議会担当報告(菊池理事):** 菊池理事より以下の報告があった。風疹の予防接種が始まったが、厚労省が考えている以上に、受ける人がいない。急遽前倒しで全年齢の検査費用を無償とすることになった(マスコミで報道済み)。

6) 教育部会報告

①**次世代教育・人材育成担当報告(松下理事):** 松下理事より資料に基づき以下の報告があった。「第 13 回細菌学若手コロッセウム in みやぎ蔵王」だが、令和 1 年 8 月 18 日から 8 月 20 日の 3 日間にわたり、みやぎ蔵王の旬樹庵さんさ亭(宮城県蔵王町)において開催し、無事に終了した。本年度の参加者は 3 年ぶりに 50 名を超え 51 名を数え、特別講演 3 題、一般演題として口頭発表 25 題、ポスター発表 48 題の発表が活発な質疑応答と共に行われた。今回は企業との交流が特色であった。次年度は、川端理事が代表世話人として大阪で開催することになった。決算報告だが、昨年の協賛金(台風で中止になった岡山でのコロッセウム)は全て本コロッセウムの運営資金に充てられた。また細菌学会から 30 万円を支援してもらった。今年は、日本微生物生態学会からも協賛があった。

②**教育資源発掘・保存担当(松下理事):** 松下理事より以下の報告があった。ミクロの世界からのメッセージに関してだが、以前細菌学会が作成した教育用のパンフレットを活用することになっている。冊子体ということになると再印刷、pdf だと再度著作権関係のクリア、ということが必要になる。いずれにしても早瀬氏に尽力してもらい、外部の 2 者(海洋開発研究機構と宇宙研究開発機構 JAXA)に写真などの使用許可について確認した。3 月 14 日、海洋開発研究機構から使用している写真が、再度見直したところ、はっきり分からない、とのことだった。すなわちはっきりしない情報を掲載するというのは、いかがなものかといった指摘があった。おそらくその部分に関しては、写真及び説明を削除することになる。JAXA の方だが、6 月 5 日に連絡があり、希望しているか画像利用における申請を遡って確認したが、細菌学会からの申請情報を確認できなかった、とのことであった。よって先方からは許諾できない旨、回答があった。従ってこちらも削除することになる。若干の予算を認めてもらえるのであれば、まず原版があるのか、また編集が可能なファイル形式なのか、など印刷会社に確認してもらい、もしも編集可能であれば、それら部分を削除し差し替えればいいのか、それほど大きな費用は発生しないものと思う。過去のもを可能な限り活用し経費がかからない方向で調整する。この時点で予算は発生しないが、その印刷会社を知っているということなので磯貝先生にお願いすることになった。

7) 出版部会報告

- ① **学会誌担当報告(大西理事):** 特になし。
- ② **MI誌担当報告(寺尾理事):** 寺尾理事より以下の報告があった。以下 3 点について報告する。発刊状況だが、5 月号から 11 月号までは、スケジュール通りに発刊された。12 月号についても、発刊事務が全て完了し計画通り刊行する予定である。昨年度の IF と投稿論文数減少の改善については、一年前に IF は、1.335 まで下がった

が、6月末に1,442になった。それに合わせて投稿論文数も、昨年度は250強であったが293(12月分を残している)と増加した。過去4年間で一番多くなっている。その中でも総説(IFに貢献する)が、1年前は0編、その前年度は1編しか掲載がなかったが、現時点で今年は3編掲載され、3編が査読中、3編が投稿待ちとなっている。査読中の1編は浅川賞の受賞論文である。MIのIFと投稿論文数は順調に回復傾向にある。

- ③ **用語集担当報告(富田理事)**: 欠席の富田理事に代わり早瀬氏より以下の報告があった。用語集の Web 化に向けて、アクセス数の分析ツールを導入してほしい、とのことだった。予算審議で改めて説明する。

8) 国際交流部会報告

- ① IUMS 等担当報告(中川理事): 特になし。
② 日韓微生物等担当報告(小松澤理事): 特になし。

9) 社会交流部会

- ① 研究倫理・安全保障分野担当報告(赤池理事長): 特になし。
② 利益相反担当報告(中根理事): 特になし。

10) その他: 特になし。

V. 審議事項

- 1) **学会賞選考委員会の選考結果について**: 大西理事より資料に基づき以下の説明があった。2019年10月30日(水)に209年学会賞選考委員会を開催した。小林六造記念賞は3名、黒屋奨学賞は9名の応募があり(浅川賞は0名)、これらの応募者の研究業績、会員資格、学会への参加状況・貢献度などについて検討・審議した。その結果、小林六造記念賞は明田幸宏氏と八尋錦之助氏、黒屋奨学賞は小野久弥氏、後藤義幸氏、松田重輝氏、山口雅也氏の4名が相応しいとの結論に至った。審議の結果、受賞者が決定された。
- 2) **名誉会員選考委員会の選考結果について**: 堀口理事より資料に基づき以下の説明があった。名誉会員選考委員会(堀口安彦委員長、荒川宜親、神谷 茂、中根明夫、松下 治、渡邊治雄 各委員)にて、名誉会員候補者について審議した。候補者は、太田美智男氏、富岡治明氏、光山正雄氏の3名。選考委員会による選考結果を踏まえ、3名の候補者を名誉会員に推挙することが決まった。
- 3) **日本微生物学連盟共催の合同シンポジウムについて**: 寺尾理事より資料に基づき以下の説明があった。1年前に川原理事から説明があった連盟共催合同シンポジウムについて、現在までの経過を説明したい。細菌学会からは私が、ウイルス学会からは竹田先生、感染症学会と生体防御学会からは川上先生を、窓口かつコンビナーとした。3名で相談し、各学会から40歳前後の中堅から若手気鋭の演者を推薦した。内訳は、細菌学会からは野澤先生(京都大学)、ウイルス学会からは川口先生(筑波大学)、感染症学会からは石井先生(慶応大学)、生体防御学会からは笠松先生(東北大学)。微生物学連盟に共催金を申請できるので、実行した結果、共催金として10万円を得た。その支出内訳は、演者3名(川口先生、石井先生、笠松先生)の旅費を補助するためのもの(計10万円程度: 不足分は理事会から支出)。審議の結果、合同シンポジウム案が了承された。
- 4) **第93回総会日本細菌学会総会のシンポジウムについて(本部企画)**: 菊池理事より資料に基づき以下の説明があった。要望があったので本部企画ということでシンポジウムを組んだ。一つは産官学連携シンポジウム「日本細菌学会が目指す産官学連携の戦略」、もう一つは、オリンピック関係で感染症の危機管理に関するシンポジウム「常在菌叢、無症候性保菌の新たな展開」、さらにもう一つとして日本細菌学会の人的交流も含めたミッション「人的交流増加による新たな病原菌対応への日本細菌学会のミッション」、とした。産官学連携委員会から演者の推薦では、細菌学会では「官」や「産」との交流があまり盛んではないので、どうしても非会員に依頼することになってしまった。演者の原先生(一橋大学)はベンチャーを立ち上げ、ノーベル賞受賞者がどのような形で研究デザインを作って成功してきたのか、それに関してどのようにリソースとなるファンドを獲得してきたか、といったことについて経済学的な視点を踏まえ研究をしている。椎木先生(大阪府立大学)は(細菌学会の会員ではないが)、分子認識化学という特殊な分野で、新しいアイデアを次々と出している。このような講演を通して、どのようにシーズを生かしていくのか、といった話を聴いてもらいたい。また常在細菌叢の話題も提供することになっている。特に産官学連携シンポジウムでは非会員演者が多数いるので、本部として旅費を賄って良いのかを審議してほしい。赤池理事長より、コンビナーの重複を調整してほしい(「常在菌叢、無症候性保菌の新たな展開」セッションのコンビナーを変更することになった)。審議の結果、非会員への旅費の支出と共に本部企画案が了承された。

- 5) **2020年選挙(スケジュール、管理委員会の設置等)について:** 川原理事より資料に基づき以下の説明があった。本年12月中旬頃に、選挙について会員に周知をする予定である。来年3月中旬～下旬にホームページで有権者名簿を公開する。異議申し立てを4月中旬まで行い、5月に評議員選挙の投票用紙を発送する(正確には、有権者宛に甲斐員番号とパスワードを通知)。6月中旬には投票を締切り、7月上旬に評議員投票用紙を開票する(選挙担当理事、事務局、教育ビジネスサポート担当者にて)。7月上旬～中旬には、評議員当選者への通知および就任諾否伺いを送付し、7月中旬～下旬を諾否返答期限とする(当選者からの返答期限は1週間程度)。8月上旬には、理事選挙投票用紙を発送(正確には、会員番号とパスワードを通知。新評議員名簿も同封)、9月中旬を理事投票締切として、9月下旬に理事投票用紙を開票する。10月上旬には、理事長選挙および監事・評議員会議長/副議長選挙を行ない、10月上旬～中旬にかけて理事長決定する。また11月上旬～中旬には、監事・評議員会議長・評議員会副議長選挙の開票を行う予定である。選挙管理委員会について、委員長は選挙担当責任理事の私が務め、委員としては選挙担当理事の大西理事、富田理事となるが、規定上、選考委員会委員は計5名となるため、更に2名を決める必要がある。2020年の選挙実施にあたって、ということで細則(日本細菌学会選挙細則第1章・第2章)も確認してほしい。
- 赤池理事長から2名の委員には中根理事、高井理事の推薦があった。審議の結果、選挙スケジュールと選挙管理委員会委員が承認された。
- 6) **法人化について:** 赤池理事長より資料に基づき以下の説明があった。法人化への移行の是非については、堀口理事長時代に検討し(パブコメとしても会員から意見を徴収し)、一旦見送った形となっている。見送った一番大きな理由は、財政上の問題であったかと思う。庶務担当理事と早瀬氏とも検討し、まず予算運用上、シミュレーションを行ってみた。寄付金収入を組み入れた。学会の運用の仕方によっては、寄付金を一般から募るということは(山口理事が第93回の総会の運用上においても行っている(会員から))、可能だと思う。実際に私のところで個人レベルでの寄付のお申し出があった。そのような有り難い申し入れを受け取りやすい組織にしていく、というためにも法人化は必要である。会費の減収は、会員が年々減少していく現状では避けられず、川原理事が日本学術会議で日本細菌学会の将来を憂う紹介をし、他の団体はどうしているのかと問いかけをしても、懸念が無い学会は一つもない。生化学会でも分子生物学会でもどこでも会員数は減っている、どこでも暗中模索している。そのような中で、法人化している学協会の場合は、寄付活動を受け入れやすい。法人化(一般社団法人)したところで免税措置はないが、個人レベルでいうと、寄付活動をすると、収入に関わる税金のチャージ率が変わってくるので、間接的に寄付することによるメリットが寄付者に生じる。法人化しないと寄付しづらいので何とかして欲しい、といった要望もある。前回、堀口理事長の体制下で十分に議論したかと思うが、あらためて試算してみた。
- 事務局早瀬氏からの資料に基づく試算に関する説明: 基本的に正会員数が50人ずつ減っていくといった予想に基づき試算した(学生会員数は基本的に固定)。法人化に伴う諸経費や、今後の会員の減少を想定した。現実的ではないと思われる部分もあると思うが、最悪の状況を想定して試算したつもりである。
- 以下、赤池理事長。会員数の減少に歯止めがかからないということ、また2年に一度の選挙と日韓シンポジウムでの支出を加味し試算してもらった。2019年から2020年にかけては寄付金収入を組み入れた。堀口理事長時の努力により、その前期に激減した繰越金が回復された。そこからさらに寄付金を上乘せた形で、どこまでこれが維持できるのかということだが、財政を健全維持できるかと思う。2028年度だが、会員数が実際にどこまで減少するかは分からないが、シビアに見たものである。その時点では、試算上はまだ1,700万円程度繰越金がある。来年に選挙が実施され、再来年から役員体制が変わることから、再来年に法人化を目指すことになる。そのため早めに提案をさせてもらうことにした。また寄付の申し出もあることから、法人化は避けて通れないものであると考えている。もちろんこれまでも十分に議論が尽くされていたということも承知しているが、その上での提案である。これまでは収入を会費収入のみに頼ってきたが、違う次元で(一般市民からの寄付を募っていくためにも)収入を確保する必要がある。現状では、産業界は難しい。寄付することには何らかのメリットがなければ寄付してもらえないので、その大前提である、法人化(一般社団法人)に踏み切るべきだと強く思う。審議の結果、法人化することによる寄付行為の税制上のメリットなどの情報収集や法人化後の試算の精度向上なども含めて更に検討を行うと共に、継続的に意見聴取を行い、議論していくことになった。支部会費についてもあらためて整理しそのあり方(本部が吸い上げるのを止めるのか)について審議することが決まった。
- 7) **各支部の今後の運営について(法人化以降の運営および2020年支援費について):** 赤池理事長より以下の説明があった。法人化した後で支部を切り離していくという話なので、改めて議論したい。

- 8) **九州支部会の新たな取り組みについて:** 赤池理事長より資料に基づき以下の説明があった。九州支部会から、これまでとは全く違う趣旨で活動していきたい旨の提案があった。提案内容だが、九州支部では名称を九州微生物研究フォーラムとする。各年度の集会の名称は「九州微生物研究フォーラム2020」のスタイルとする。背景は、「日本細菌学会における支部運営方針の見直しが進み、支部会費の徴収がなくなるとともに、本部からの支部への交付金も基本的になくなった。これまでの九州支部会(細菌・ウイルス合同)の運営は本部から交付金に大きく依存していたことから、九州支部会の今後のあり方・運営方針についても見直しが必要となった。一方で、本部から交付金がないことは、自由な形で本会を発展させることができることを意味する。これらの点を踏まえて、2018年度の支部評議会(合同)で、今後の本会の運営方針等について議論が行われた。この議論を踏まえて、2020年以降、細菌学会とは別会計で運営することを提案し、2019年度の合同評議会と日本細菌学会九州支部総会において承認された。」とのこと。その(合同)運営には、細菌学会だけではなくて関連学会(ウイルス学会だけではなく、免疫や生化学会など様々な分野)と既に合意済みとのこと。フォーラムの開催は、その時に必要な額を参加者から集めるとのこと。資料は案となっているが、林理事によると決定事項とのことであった。したがって九州支部への支援は今後必要ない、とのことであった。ただ日本細菌学会九州支部という組織は残したいとのことであった。独立採算で行っていく方向で決定している。このような方向性の可否について、理事会で決めることができるかも含め、意見を聞きたい。検討した結果、あらためて提案事項について説明を受けた上で、再度審議することになった。
- 9) **微生物学研究プレスリリースポータルサイトの設置・運用について:** 河村理事より資料に基づき以下の説明があった。広報委員会からだが、これまで関連学会等への本学会総会開催告知のポスター送付、総会開催時のプレスリリース講演の公表を行ってきた。今回は、各先生方がご所属の研究機関・大学等において、プレスリリースをした際に、その情報を寄せてもらい、日本細菌学会のホームページ上でリンク集(微生物関連プレスリリースのポータルサイト)を作る。個人においては、研究内容を発信する上での広報となり、細菌学会としては、色々な方面の研究があるので、細菌学会のリンク集を除けば微生物学研究のトレンドが分かる、というようなページを作りたい。これは既に所属の研究機関等で承認をされてプレスリリースという形で公知されているので、細菌学会がまとめサイトを作っても特段問題(責任)は生じない。具体的には、細菌学会ホームページのトップ画面左側に「微生物学研究プレスリリースポータルサイト」と称する入り口を設置する予定である。また今回の設置は、先行して実施している他学会(日本植物生理学会)を模して作成することにした。投稿してもらった情報に細菌学会で付加価値をつけることはなく、投稿された情報を機械的に掲載することになる。会員への案内も資料として用意してあるので確認してほしい。最初は数が揃わないと思うので、1年程度前に遡って知らせしてほしい。審議の結果、その運用(既に公表されたプレスリリース情報に関して審査を受けバナーにリンクを貼る)に関して了承された。
- 10) **寄付金の運用方法について:** 赤池理事長から資料に基づき以下の説明があった。実際に既に予算にも組み込まれているが、日本微生物研究所から今年度は500万円の寄付を頂戴した。来年度また500万円の寄付を頂けることになっている。この研究団体の利益に関与するような活動に充てるものではなく、純粋な寄付として運用していきたい(寄付団体代表者の強い希望でもある)。その一つとして今回、東京オリンピックでの感染症予防に関わる啓発活動などとして第93回総会内でのシンポジウムや市民公開講座の開催を計画している(第93回総会内シンポジウム: ①東京オリンピック関連の企画(シンポジウム)「人的交流増加による新たな病原菌対応への日本細菌学会のミッション」、②産官学連携の企画(シンポジウム)「日本細菌学会が目指す産官学連携の戦略」、市民公開講座: 日本細菌学会・東京大学共催の市民公開講座*会場費3万円)。今回の支出はわずかなのでこの寄付金をどのように運用していくのかを検討する必要がある。支部レベルでの経費に充てるとか、意義があるような企画があれば。またオリンピックもあるので、東京を中心として日本は動いていることもあるので、関東支部で運用する、といったこともあるのかと思う。以下、阿部関東支部長からの提案: 例えば、食の安全対策というものはどちらかという大人というか社会人向けのものである。例えば、北里柴三郎記念館や東大医科研博物館などでの子供向けの安全管理や健康に関連すること(オリンピックを迎えるので)、どのような感染症を注意しなければならないのか、大人の方ばかりではなく子供向けの方も企画しても良いのではないかと考えている。例えば資料館等、夏休みになるとスタンプラリーのようなものが開催されるが、そのような形で色々なところを回るようなホームページ等を作って、子供向けの企画があれば良いのではないかと思う。また博物館と提携するとなると費用が嵩むが、そういうところで提携してあまりお金がかからないようなところで、例えば子供向けとかファミリー向けに、楽しめるようなものができればと思う。野口英世記念館では、子供向けにリニューアルされ

ている。色々な観光と歴史を訪ねるような企画をしている。

以下、赤池理事長：非常に重要な提案かと思う。何か関連したことで良いので意見はあるか。阿部先生にはもう少し具体的なものを提案してもらい、それを踏まえ改めて理事会に提案したい。寄付金の全てを使う必要はない。永久とは言わないまでも継続して運用できるようなものを設置し、その維持に充てたい。そのような取り組みで成果が上がれば次の寄付にも繋がっていくのではないかと思う。本会は会費だけでは維持できない。民間の産業界の製薬メーカーからの寄付は期待できない。また一般からの寄付はありがたいが、今回の寄付は例外的なものである(使用目的の希望がない)。今後、寄付してもらえるような環境作りを心がける必要がある。そのことが細菌学会の一つの使命である。寄付金の用途について、いろいろな企画(松下理事が行っている教育・資源発掘に関わるものなど)を出してもらい、改めて検討することにする。

- 11) **2020 年度予算(案)について:** 河村理事より資料に基づき以下の説明があった。収入: 正会員、学生会員、外国人会員からの収入に関しては、今年度も現状を反映した形になっている。増減としては若干のマイナスとなっている。雑収入だが100万円アップした。病原体等管理指針(NEW)の販売数として計上したものである。現時点では収入の総計は、42,327,080円。支出: 総会準備費とシンポジウム関連費に関しては、例年通り15%減となっている。日韓シンポジウムの予定はないので、予算計上はない。支部支出費と委員会費については、本年度の実績を持って計上額を減らした。広報関係は、6万円増額しているが、プレスリリースポータルサイトの費用を計上した(月に1-2度の更新費: 年間5万円)。用語集のアクセス数の分析ツールだが(分析ツール自体は無料)、最初のシステム構築費を計上した。次年度は選挙があるので、選挙費用として160万円を計上した。予備費は、823,100円増加している。これに関しては、先程の寄付に関連して、本部企画のシンポジウムで25万円を確保した。また病原体等安全取扱・管理指針改訂版の印刷費57万円(見積もり概算)を合わせて計上した。単年度収支としては、390,373円の黒字となっている。審議の結果、予算案が認められた。
- 12) **第24回日本微生物学連盟理事会での検討依頼について:** 報告事項で審議済み。
- 13) **2020年の日韓国際微生物学シンポジウムについて:** 小松澤理事より資料に基づき以下の説明があった。韓国微生物学会の担当者は決まっておらず、次期のKSM理事長からメールをもらった。結論としては、来年度はIUMSが韓国で開催されるため、次は2022年に行いたいということであった。前回理事会の際に、ジョイントでできないかといった話もあったので併せて確認したが、難しいとの回答であった。IUMSがKJISMに当初は参加していたが、今はそこから抜けたということで、韓国の微生物学会そのものは開催されるが、ジョイントとしては2022年にお願したいとのことであった。当初から担当者が決まっておらず、どの程度やる気があるのかは疑問であった。もし継続するのであれば、双方の担当者が学会マターで連絡し合う等、そのような機会がないと、なかなか難しいと思う。審議の結果、韓国側の提案を受け入れ、来年の日韓合同シンポジウムは見送ることになった。
- 14) **来年の契約について(口腔保健協会、中西印刷株式会社):** 事務局早瀬氏より資料に基づき以下の説明があった。主に消費税が10%になったことに伴う事務委託費の変更である。会員数の変動も反映されている。事務委託費(口腔保健協会)は、2019年までは287,000円/月だったが、2020年からは291,500円/月となる。審議の結果、事務委託費の変更が認められた。
- 15) **次回理事会開催日について:** 2/18 火曜日 13:00 から(事務局早瀬氏よりあらためて連絡あり)
- 16) **その他:** 支部会費の推移やその理由について意見交換があった。

VI. その他

VII. 閉会